Tractatus ortographie gallicane per M.T. Coyfurelly

── M.T.コワフュルリィの「ガリア語正綴論」──（訳）

福　井　秀　加

援助を必要とする者は誰であれ，すみやかに援助を得ようと望むところで自らの収穫をする必要がある。若い時に様々な能力をもって花を咲かせようと望む者は多い。それはちょうど様々な木と草木の力をしっかりと植え込んである庭園が屢々多くの果実をみのらせ，春の時期に薫り高い香気を馥郁と漂わせるのを見るようなものである。

一つにして三つの位におわします三位一体のお導きにより，私は力及ばざる者ではあるが，ガリアの言葉とガリア語の書かれたるものの形を規則に従って守ってゆこう。そして海の彼方の国々における習慣に従って優しく話そうと意図する。そこから草木の枝はその習性と錬磨によってまず花を咲かせ，ついで更に立派な姿をみせることになるであろう。王の王なるお方のお慈悲によって。

さて，まず第一にフランスの国におけるアルファベットに従って文字の音を知ろう。そして今日において正確に書かれているままに説明しようと思う。

a b c d e f g h i l m n o p q r s t
Ae. Bey. Cey. Dey. Ea. Efa. Gey. Assh. ij. K. al. am. an. o. Pey. Queu. Aar. Esa. Tey.
u x y z
yu. Eyx. y. Edez.

最初に文字の中のあるものは母音で，あるものは子音であるという事を知らねばならぬ。母音は５つ，即ちａｅｉｏとｕである。それらが母音と言われるのは，おのずから完全な声を作り，それら無くしては如何なる文字の音も発音され得ぬからである。

そしてその５つの母音の中で，２つが子音の性質に移行する。ｉとｕである。丁度それらがある音節のはじめに置かれる時は次に続く母音と同じ音節を作る，例えば：
juex（遊び），vanter（自慢する），jouster（馬上槍試合をする），voiser（行く）など。又同じ様な言葉においても同様である。

１．ａはほとんど字母ｅと同じように発音しなければならないと知るべきである：
Savez vous faire un chancon（歌がつくれますか）
Savez vous trair del arc（弓をひけますか）

Pierre remaint al hostel（ピエールは宿に止まる）
Saint Jaques est un tresnoble saint（サン・ジャックは高徳の聖者です）
J'en ai un bonne hopelande de pearce（私は上等の皮の上衣を持っている）
J'en ai grand paour（私は大層恐ろしい）
Je l'ay achivee（私はそれを成し遂げた）［アンダーライン筆者］
また斯様に同様のものについては同じ判断をすること。ローマ人はまことに明確に完全な声でaと発音する。faire（成す）traire（引張る）とこのように。

2．Bは事実，語の中間に置かれると発音される。
例えば：
debruiser（破壊する），tribuiller（苦しめる），troubler（混乱させる）の如く。ただし次の語は例外とする：
debtee（借金のある），eudebtee（負債のある），soubz（下に），desoubz（その下に）。
次の動詞においては発音しない：
doubter（疑う），redoubter（おそれる），soubstituer（代える）これらの動詞ではどのような法や時制にあっても，単数あるいは複数にあってもbは発音されない。
まさにそれらの動詞から派生した全ての名詞と分詞においても発音されない。それらの語の中にbと書かねばならないが発音してはいけない。従ってdoubtee(おそれ多き)やtres-doubtee（いと畏き）など，また同様の語の中にbを欠きdoutee，tredouteeと書く人は間違っている。

さて，このようなa（avoir）やen a（il y en aそれがある）という語は同じ意味である，というのは動詞habetとして理解されるのであるから。それらの文字に付けて多くの文字を書く事なく，切り離してそれだけを書かねばならない。故にadやen adのように語末にdを付けてこれらの語を書く人は間違っている。これらの語からdという文字の音は決して生じぬからである。また，このような語avrai（avoir 1re pers. sg. fut.）en avrai（私はそれを持つだろう）は語中にeなしに書き，そのように発音しなければならない。しかしガスコニア人やその他の人達はこの語で常にeを発音し，eを語の真中に書く，このように：
averai, en averaiと。それはガリア語ではなく，いわんやロマン語でもない。また次のような語，即ち：
je（pron. 1re pers. sg.）jeo. jo, jou, ce（pron. démonstr. sg.），ceo, cou, chouは多様な言葉の習慣と正しい音に従って，それが明らかに分かるように書き，そして発音しなければならない。

3．Cは語中に置かれるとzあるいはsの音を持つ。例へば：
ca（其処に），pieca（昔），tanquenta（同数の），recoi（受取り），aincois（このように），francoys（フランスの），doulcour（優しさ），beneicon（祝福），rancon（身代金）等々と同様のものにおいて。これらの語は常に上記の如く，上記の形に従って書くべきである。時にCはkの音を持つ，例へば：
cas（場合），car（何故なら），canter（歌う）や，その他同様のもの。

4．Eはほとんどaという字と同じ音を持つ。特に語末にあっては短く鋭いアクセントで発音されるべきである。即ち：
Je vien i endrois（私はそのあたりへ来る）
Veicy belle chose（ここに美しい物がある）。

5．Gはところで，語中にあって母音と子音の間に置かれるとnとgとほぼ同じ音を持つ：
compaignon（同僚），compaignie（同伴）
moigne（修道師），maigne（傷つけられた）のように。
しかしフランス人は大部分の者が語中にnを書く，次のように：
compaingnon, compaingnie, moingne, maingne この場合のほうがよい。

6．Hはまことに文字ではなく気音のしるしである。例えば次の語において：
huis（習慣），hors（外），hounte（恥），hony（恥ずかしい），hault（高い），hopeland（外套），herde（群），aherder（群がる），Jehan（ヨハネ），hard（綱）これらではhは常に発音する。
しかし次の語ではhは呼気をもって発音すべきではない：
hinc（？）（ここから），huy（今日），hier（昨日），heure（時間），le hostel（宿），helas（あゝ：感嘆詞），huiseux（布製），regehir（告白する）そして同様の語も同じ。

7．Iとeあるいは他の二つの母音が相互に結ばれている場合，iとeは語中にあって二つの子音間，あるいは母音と子音の間，又は語末に置かれた時，実際にはその両方の部分から音を取る，即ち：
biens（財産），ciens（此処に），siens（彼のもの），liens（きずな），miens（私のもの），riens（事柄），arraier（並べる），baier（あくびをする），joye（喜び），voie（道），ie（わたくし）
だからこれらの語におけるi又はeが確実に音を失なうべきであるという人は，ローマ人であれ，ガリア人であれ間違っている。何故ならガリア人もローマ人もこのような語にあ

っては常にｉとｅを二重母音のように発音する。
しかしローマ人たちは言葉において同じようには書かない。まさに，斯様に書く，即ち：
beins, ceins, leins, meins, reins, sceins, bein や ieo などのように。
この場合ガリア人は biens, liens, ie と上述のように書く。

8．K はローマ字では，ガリア語におけるようにではなく，c と h とのところに書き，ガリア語においてchival（馬）になったkival のように又 chien（犬）になった kien のように，そして又ガリア語においてvache（牛）になった vake のように発音はされなければならない。
そして時には q を書く，quesne は chesne（樫の木）である。ローマ人によれば c の場所に c と h が書かれてはならないのである。このようにpour chou (picardie : pour ce) 又は pour cheu に対してガリア語ではpource（そのために）又は pourceu でありdeckaに対してdeca（此処から），tres douche に対して tresdoulce（大変優しい）となる，その他同様の語についても同じ。
　ローマ字で身分，尊称や職名を示す語は，実際には単数であるが，複数で書かれる。即ち：
lui papes de Rome（ローマ教皇）
l'empereurs d'Alemaigne（ドイツ皇帝）
lui rois d' Engleter et de France（イングランド及びフランスの王）
lui chauncellers du saint peres（聖ペテロ寺院の枢機卿）
lui tresoreres mons.（財務長官）
lui duques de Launcastre（ランカスター公）
lui recevours madame la roigne（女王の収税人）
lui sainz esperes vous garde（聖霊の守りあらんことを）
この場合ガリア人は s なしに，これらの名詞を単数で書く。それはより美しく簡潔である。例へば：
le pape de Rome, l'empereur de R.
le Roy d l'Engleterre と，その他についてもかくの如し。

9．L はしかし語中におかれて，母音がすぐに続く時は固有の音を保つ。即ち：
ennelement（早く），parlant（話している）と。
しかし，もし子音がすぐ続くとその時は u と，このように発音されねばならない。即ち：
loialment（忠実に），principalment（最初に）など。
ilsという語はしかし例外であって，この語にあっては l は u 音を殆んど保たない。即ち：

ils vont ensamble（彼等は一緒に行く）

ils ont fait（彼等が成した）

又 l が語末におかれ，次にくる語が子音で始まるときは固有の音を消失し，あたかも u のようにきこえるのである。即ち：

l'amiral d'Engleterre（イングランドの提督）

chival soer（赤い馬），fiel de fust（木材の樹液），seal d'argent（銀の印璽）

fiel de makerel malvais est（鮪の肝は悪い）

beal filz escoutez（良い子よ，聞きなさい）［アンダーライン筆者］

もしまことに次の語が母音で始まると，固有の l 音をまちがいなく保持する。即ち：

nul autre（ある誰かの），nul enemy（どんな敵も），nul ignorant（或い無智なる人），nul homme（ある人）nul usage（何等かの用法）

語末におかれた l，すなわち単音節の語末にある時は，直後に子音がくると u という音をほとんど持たない。即ち：

il s'en est alee（彼は行ってしまった）

il le vuil bien（彼はそれを大層望む）

などで，其の他の語についても同様。

美しいガリア語にあっては，次のような語では疑いなく l は発音してはならないことを知るべきである。

hostel（宿），oil（然り），ombril（臍），penil（櫛），seel（印璽），sil（もし彼が），nonil（否）

しかし，次のような語，即ち：

ael（葱），ael（祖父），ciel（空），ciel（瞼），voel（私は望む），oeil（目）では l は何等そこから生ずるところの例外がなければ，常に発音される。

又一つ，次のような語，即ち：

fiel（真実の），chapel（礼拝堂），chastel（家財），chastel（城），pel（皮膚），pol（池），col（首），fol（無礼な）では，例外なく美しいガリア語の正しい音に従って l は u の音を持つだろう。LLという二重子音が語中にある時はその音は完全に充分きこえる声で発音されなければならない：

fille（娘），fillete（小娘），oraille（耳），orailler（枕），aille（翼），oaille（羊）

しかし，次の若干の語では ll はやさしく発音されねばならぬ：

elle（彼女），belle（美しい），ycelle（その），nulle（何でも），quelle（どのような）そして同様の語も而り。

ローマ人はまことに，特に l をどの様な場所でも何の支障もなく発音する。

10. N はしかし母音と子音にはさまれ，ある語の語末に位置すると正確には発音されない。それらは動詞 3 人称複数，直接法ないし願望法であって，どんな時制にあっても発音しない。例へば：

ils aiment（彼等は愛する：aimer, ind. prés. 3epers. pl.），ils lisent（彼等は読む：lire），ils dient（彼等は言う：dire），ils amoient（彼等は愛した：ind, impf.），ils lisoient（impf.），ils disoient（impf.），ils amerent（ind. prét.），ils listrent（prét.），ils distrent.（prét.），ils amassent（subj. impf.），ils laissassent（subj. impf.），などこのような種類のものである。

しかし，次の動詞は例外，例へば：

vont (aller : 3epers. prés. pl.), ont (avoir : 3epers. pl.), font (faire : 3epers. prés. pl.), avoient (avoir : ind. impf. 3epers. pl.), eurent (avoir : prét. 3epers. pl.), estoient (être : ind. impf. 3epers.pl.) furent (être : prét. 3epers. pl.) fesoient (faire : ind. impf. 3epers. pl.), firent (faire : prét. 3epers. pl.)

これらの全ての複合動詞についても同様。即ち：

envont（其処から行く），enont（それを持つ），enfont（それでもって成す），ensont（其処から存在する），enavoient(それを持っていた)など。これらの語では n は固有の音を完全に保つ。

11. P が語末に置かれた時，子音が直後にくる場合，固有の音を完全に失わなければならない。例えば：

ne massez ja trop grand avoir（余り多くの財産を蓄積するな）

語末の屈折語尾の P で終わる固有名詞は別である：

philip のように発音する。

更にもし母音が直後にくるならば固有の音を完全に保つ：

mieulx vaut assez que trop avoir（多く持ちすぎるよりほどほどの方が価値がある）

また，名詞 dras（布），tens（時間），cors（体）という語は P なしに書かれるべきである，その場所で正確な音が要求するように。

ローマ人はその規則を守らず，大部分の場合 P が常に書かれる。

そしてガリア語でも次のように書くことがある：

draps, temps, corps と。

12. Q は常に弱くはないが柔かな音を持つ。そして直後に続く二つの母音のうちの最初が u であるような場合でなければ，どの語にも書いてはならない。例へば：

qui（誰が：疑問代名詞関係詞），que（それを：関係詞接続詞），quar（何故なら），querre（探す），querir（求める），quir（皮），quarre（四角い），auquant（いくつかの）なとである。このような語で u を伴なわずに q を書く者は間違っている。即ち：

qi, qe, qar, qerer などのように。
そのような書き方をする人は誤っていて，それは不適当だ。何故ならそれはガリア語の綴りの規則に従っていないからである。作る人の気に入るということだけで，合理的な基礎も理由もない。賢者は言う。弱い基礎は作品を台無しにする，と。そのような事が存在すると言ったり教えたりすることや，合理的な理由を規則正しく見ないことは問題外である。そのような学説が存在するのは何の価値もなく，拒否されるべきものだ。
quarという語は書く人の意志によりk，q 又は c のいづれをもって書いてもよい。というのはk，q と c は常に同じ効果を持ち，語頭におかれて直後に母音が来なければ決して書かれない。しかしまた同じ様に綴られるのではない，なぜならある語に用いられた q はどの様な用法であってもラテン人の間で，特にラテン語の技巧では常に二つの母音が続く場合に書かれるのであるから。その最初の一つは u である。

13. R は語末に置かれると常に z 又は r と無差別に発音される。このように：
j'en ay grand mol ou cuer（心に大きな苦しみを持つ）
j'en ay bon quer（優しい心を持つ）
しかしガリア語では r というより z と同じ音の方がより美しい。しかしこの規則は次の語における如く全ての語で守られるわけではない：
quar，querir，ferir（嵌込む），ferrer（鉄を打つ）
これらの語では r は常に固有の音を持って発音される。これに類するものも又同じである。

14. 単独の S は直後に子音がくると語中では発音しない。ちょうど：
tresdoubte（畏れ敬われた），trenoble（大変高貴な）
tresgracious（いと優雅な）これらのように。
この規則から例へば，次のような語が例外とされる。即ち：
chastel（城），chastayne（栗の実），substance（実質），registrer（登録する），fust（木），oscurte（暗がり），oscure（薄暗い），oscurement（暗く），oscurer（曖昧にする），sustiner（支える），substituer（代える），escharnir（あざける），transglouter（飲み込む），inspirer(吹き込む)，discharger(荷物をおろす)，estancher(枯らす)，estendre(拡げる)，espaundre(説明する)，peschier(魚を釣る)，estreindre(締めつける)，dispenser(消費する)，escuser（許す）
又，これらと同じ語から何等かの方法で作られたもの，あるいは派生した全て分詞，名詞，そして副詞などにあってはたとえ子音がすぐ後にあっても s は常に発音されなければならない。
そしてもし母音がすぐ後に続くなら s は本来の音を完全に保有する。即ち：

tres excellent（卓越せる），tres haultisme（いと高き），tres honure（まことに尊敬された），tres humble（いとつましき）など。

複合字のSSは語中におかれる場合，常に発音される。即ち：
trespassant（通過する），tresfoissable（いと誠実な）あるいはtresfoiable（まことに忠実な）などである。
もし単独のsがある語の語末におかれると，その語がたとえ代名詞，動詞，接続詞又は前置詞であろうと，次に子音で始まる語が続く時には本来の音を最小限に保存する。即ち：
dieux vous saut et garde（神が貴方を助け守り給わん事を）
vous seintez vous sainz au cuer（御気分は爽快でしょうか）
veullez vous manger（召し上りますか）
vuillez vous juer（一勝負しますか）
J'ie regardez（私は見た）
mon tresgentil compaignon（私の親切な友人）
coment leur vestimentz sount bien et fetisement entaillies selon le guise du France
（如何に彼等の衣服が立派に形よくフランス流に裁断されていることか）
par le foy que je doy a Dieu（神かけての信仰心によって）
mon tres doulz amy（私の優しい友）
j'en ay veu beaucop des gens huy ou marchee
（今日市場で多くの人達を見た）
しかし，もし次の語が母音で始まるとその時sは発音する。即ち：
vous aimez（貴方は愛する）
vous empriez（貴方はそれについて祈る）
soiez vous icy（此処にいて下さい）
vous oustez la table（テーブルを片附けるように）
estz vous un d'eux（貴方は彼等のうちの一人ですか）
そして，このような他の語も同様である。ただし次の語は除く：
vous ditez vray（貴方は真実を言う）
vous le disoiez vraiement（貴方はその事を本当に言った）
ils ount fait（彼等は成した）
このようにして，母音が直後に従ってもsは発音されない。
ローマ人たちは大部分の者が語中にあるsを常に発音する。このように：
dont estee bons（だから貴方は善い人なのです）
je m'en iray al ostel et je revenrey tantost（宿へ行ってすぐに戻ってきましょう）

qu'est la droite au Liege（リエージュへのまっすぐな道はどれですか）
ガリア語においても同じ：
qu'est la droit chemyn vers Liegez（どれがリエージュへの正しい道ですか）
mon amy vous irez a devent（友よ先に行って下さい）
et quant vous serrez la, vous ne pourrez nient marrir（其処へ行ったら困ることは何もないでしょう）
全ての名詞，分詞，副詞そして感投詞において単独のｓが語末におかれている場合，単数でも複数でもｓは常に発音される：
temps（時），corps（体），bras（腕），dos（背），huis（戸），fois（機会），noes（舟），noces（結婚），poirs（梨），pourrez（できる：pouvoir, fut. 2epers.），orguelleus（傲慢な），dispeteux（軽蔑的な），crementeux（恐ろしい），paourez（驚く），tremans（震え），trechans（切れる），estans（池），dis（10：数詞），lis（百合），assez（かなり），ades（常に），jadys（且て），helas など，同様のものも斯くの如し。
この規則から次の語が除外される：
viz（顔），pis（胸），mis（私），quantes（いくつの），longnes（長い），tous（全て），bons（良い），petiz（小さい）そしてgranz（大きい）
それらは男性であれ女性であれ同様であり，又この副詞 pas も数詞 dis も同様である。
これらの語 pas と dis ではｓは時に発音され，時には発音されない。もし直後に母音がくるとｓは音を保つ。
il en y a dis hommes loeggez a nostre hostell
（我々の宿に10人の人達が泊っている）
しかし子音がくる場合は発音しない。例へば：
j'en ay dis livres（私は本を10冊持っています）となる。
また，dis が過去分詞として理解される時はｓはそこで自らの音を保つ。即ち：
les sermons sont dis certainement（誓いの言葉が確かに言われる）
又，次の語 guaires（殆ど），ubaires（従順な）は除外される。さらに，直後に母音が続かなければ，これらの語はｓを発音してはいけない。このような場合のほか：
je m'aresterai guaires en marchee（私は歩いている間殆ど休まない）
またある語の語末にｓが来るのでなければ発音しない：
beal filz ne demourrez guaires（美しい子よこゝに少しでも留まってはいけない）。

15. T がある語の語末におかれる時，その語が動詞３人称単数の直接法現在時制又は過去の場合，あるいは代名詞の場合，次にくる語が母音で始まる時は発音しなければならない。即ち：

est il prest（準備できていますか）

estoit a l'oster（宿にいた）

il fut enmervaille（彼は驚いた）

il fut ignel（彼は足が早かった）

il fut oiseax（彼は暇であった）

il fuit humbles（彼は謙遜であった）

cest escuiér icy chante tresbien（此処にいる騎士の従者は巧みに唄う）

しかし次にくる語が子音で始まる場合は t を完全に除外して発音する。即ち：

qu'est ce q'il dit（あの人は何と言っていますか）

il est prest（用意ができている）

il ne peut chaloir（必要ではあり得ない）

il ne fait que pour esbatement（彼は楽しみのため以外には何もしない）

que dit vostre meistre（貴方の主人は何と言っていますか）

que fait monsieur（その人は何をしますか）

Monsier vous ottroit de vous donner deux noble d'or（主人は二枚の金貨をお前に与えることを許す）

il estoit bien gracieus（彼は大層優雅であった）

il fut noble chevalier et vaillant（彼は気高く勇敢な騎士だった）

il fut tost dis joyeus（常に彼は陽気であった）

il fut vaillant, gentil et sage（彼は勇気があり礼儀正しく賢明であった）

il n'y a que vaintee ou ceste ciecle（この現世には虚栄しかない）

そしてこの他も同様。ただし次の語，即ちlist（読む：lire），et（そして），prent（取る：prendre）は例外で，それらの語との全ての複合語も例外であって，その語にあっては t は常に発音されねばならない。又一つ語末の t は第3人称単数命令法の動詞においては音を最少限度に発音する。次のように：

Dieux vous beneit monsieur et la compaigne

（貴方とお連れの方を神が祝福されますように）

Dieux vous ottroit de bien faire

（神が貴方に善行を許されますように）

Dieux vous conduist et avance

（神が貴方を導き進ませ給わん事を）

male semaigne soit a vous mis

（悪い一週間になるように）

しかし乍ら次の語 boit（飲む：boir），puit（匂う：puir），poit（できる：pouvoir），eit（持

った：avoir)，gart（守る：garder）とait（助ける：aider）は除かれる。これらにあってはｔの音が保たれ，常に発音される。次のように：

boit il a l'aultre（彼は他のものに乾杯する）

il puit malvaisement（悪い臭いがする）

il peit vilainement（悪行を為す）

Dieux vous ait toutdys en sa garde

（神が常に貴方をお守り下さるように）

Dieux vous gart biau sire（御立派なお方，神の守護がありますように）

si Dieux m'ait（神が私をお助け下さるよう）

vous estez proudomme（貴方は立派な人だ）

単数においてｔに終る名詞，分詞は複数では語末にｓ又はｚをもって書かねばならない。それらの語では正しい音が要求するようにｔを完全にとり去るべきである。例へば：

単数で終るsaint（聖者)のｔは複数ではsainzとなる。pourpoint（胴衣)は複数でpourpoins。pot（壷）はpos。li part（部分）はli pars。dovet（衣服の布地）はdoves。tout（全て)tous。gent(人)はgens。tenant(保有者)はtenans。merchant(商人）はmerchans。fait（事実)はfais。hault（高さ)はhauls。dit（言われた事)はdis。lit（寝台)はlis。

などであり，同様の語についても而り。こういう次第で，ガリア語の正字法に従って複数でtz又はtsこのような語に書くのは間違いである。それはガリア人の間で一般的な規則であるから。

何となれば，ある語の中にどんな場合でもｔがおかれるとはっきりと発音し，無音にしてはいけないのである。であるから語の中には直後に母音がくるのでなければ，たとえ女性の語であっても語中にｔを書いてはいけない。

次のような場合：

les saintes vierges des ciel ne cessent ades de loier (louer) nostre sires（天上の聖女達は絶えず我等が主をほめたたえる）

Dieu pour la grande grace et misericorde qui'l les a fait et moustre（神が彼女等に下し示された大いなる恩寵と慈悲のゆえに）

a toutes et quantes fois vous plerra venir vous serrez tresbien venu（お気に召す時は何時でもおいで下さい）

il en y a des fammes en ce pais icy que soit bien richez merchauntz（この国には大変裕福な商人の御婦人方がおられる）

同様の語についても同じ。

しかし同じ様にこれらの語sains（聖者)，touz（全ての)，merchans（商人）や同様のものに子音を書いてはいけない。これらは男性で語末にtz又はtsを持つ，例へばsaintz, tous,

merchanzのように。従ってこれらの語は単数は t で終るが複数では t の音をどのようにも保たない。

また，過去分詞と理解される dis（言われた：dire）という語でこの規則が間違いだと言われるとすれば，数詞の dis と区別するために語末に tz をもって書くべきである。

名詞あるいは動詞のどちらにせよ，言葉の本来の多義性のためにこの様にして対立させられる。しかしどのような言葉が問題であろうと，自らの綴りの確かさを何等変えることはない。例へばある語は三つの意味を持ち，ガリア語動詞 fair は六つの意味を持つ，それはその他の多くの言葉についても同様である。おのずからの多様性があろうと書き方を変えないというのは，様々な話し方によって話の内容が充分に伝えられるようにということである。

従ってsains, tous, merchans など，その他同様の語は複数においては語末を s または z をもって書き ts や tz をもって書くべきではない。何となれば tz と ts は意味を持ち，そこから出た z は s 音を完全な音で保つのである。

しかしガスコーニュ人は前記の規則を守らない。何故なら彼等は上述の語を末尾において tz, tsをもって書く。このように：

mon car amys sont voz litz uncores faitz（親しい友よ貴方の寝床はまだ準備されている）

mon amys sont mes pourpointz faitz（友よ，私の胴着は作ってあります）

まことにこのガスコーニュ人の言葉はガリア語に従って次のように書かねばならない：

mon amy sont mes pourpoins uncores faits

（友よ，私の胴着はまだ作られています）

次の語即ち：

fuils(子息)，mieulx(より良く)，fois，ades，asses，vous poez(貴方はできる：pouvoir, ind. prés. 2^e^pers.) vous pviez（pouvoir, ind. impf.2^e^pers.) vous poiez（pouvoir : ind. prés. 2^e^pers.) amiez（愛する：aimer, ind. prés. 2^e^pers.) enseignez（教える：enseigner) lisez（読む：lire) oiez（聞きなさい：ouïr)

これら，又同様のものはこのように書くべきである。従って tz をもって次の語を書くのは間違っている：

fitz, mieultz, foitz 又，これと同様のもの。それらはガリア語ではない。それらの語からフランス語は t という音も綴りもいささかも保たぬ。それらはまことの正しい音に従って正しく書かれるべきである。もしそれらの語が s または z で終る，動詞あるいは前置詞である限り tz 又は ts が語末に書かれ，そしてもし子音が従う時は，[例へば] この 2 人称の動詞 poetz を poet と発音するが，それはフランス語ではない。語末におかれた一つの s についての規則において上述の如く，それは常にガスコーニュ語と完全に承認されている。

また同様に 2 人称の動詞・単数名詞または副詞は音において，あるいは綴において t をい

さゝかも保たない。しかしこのように2人称の動詞 tu peus に対しては tu peut と書くが，この場所では不適当ではない。そしてかように fuilz という語に対しては，決してそのまま発音せずに常に fitz というのだ。それは悪い音である。従って次のような語，即ち：
fuilz, mieulx, fois, ades, asses, vous poez と，又同じような語についても同様であるが，ちょうど正しい音に従えば，言われているように t なしに書き，発音する。
t は et という接続詞にあってはガリア語では書くけれども発音されない。以下の如く：
et je vous fais savoir que vous n'echiverez ja, se ce n'est par la soveraigne Dieu
（また，貴方に知らしめる。もし全能の神の加護がなければ貴方は決して成功せぬであろうと）。

16. U は語中におかれると固有の音を省略せねばならない，ちょうどラテン語，ガリア語，その他キリスト教国の多くの語において見られるように。すなわち，もし g，q，または s の三つの文字が語の中におかれる場合である。このように：
qui (pron.c.s.)，que (pron. conj.)，lengue（舌），lenguage（言語），guerre（戦い），guerry（治った），guaires（多く），suef（渇く）
又，同様のものなどの場合。
一般に母音に子音でない u がつけ加えられるとそれは力を失う。例へば：
suavis（心持よい），queror（求める）あるいは aqua（水），lingua（言葉）などという語がそれを証明する。
g のあと，q のあと又は s のあとに隠れた u が認められる。我々の用法によれば二重母音は u から始まらない。注意すべきことは，作者の証明するところによると二重母音とは二つの母音が，相互にそれぞれ同一の音節の中で自らの音を保ち結合している音のことであって，次の如き四つの二重母音がある。即ち：
auris（耳）のau. euge（眼）のeu
musae（音楽の女神）のae. poema（詩）のoe である。
ただしここでは［フランス語では］最後の二つは使われていない。これらのことから明らかな如く，全ての二重母音は au のように a で始まるか，eu のように e か，oe のよう o で始まる。
次の語，即ち：
suavis, lingua, queror, qui においてはその二重母音は存在しない。なぜなら二重母音は u で始まらないからである。また次の語にっあては u は子音ではなくて自らの力を完全に消失している。
unguentum（油），unguis（塗油），lingue（言葉）は ungentum, ungis, lingaと読む。そして同様のものも而り，なぜなら u は自らの音を失っているから。ある人達はこの現象を上

述の理由と考えている。しかしそれは間違っている。というのは，たとえ u が固有の音を失ったとしても其処に置かれている時には一般に母音の e や i を最大限に尊重して u を発音すべきであると u は認めさせるからである。何となれば其処におかれない時は，其の場所に誤っておかれているという事になるからだ。

また，unguisという名詞と，ungo（油を塗る：ind. prés. 1^re^pers.），ungis（ind. prés. 2^e^pers.）という動詞の間に差異はない。そこで次のことが生ずる。u はそれらの語においては書かなければならないが，発音してはならないということである。ただし，ガリア語の動詞，sui（ある：être, ind. prés. 1^re^pers.）su（知った：savoir. p.p.）sue（汗をかく：suer, ind. prés. 1^re^pers.）およびその全ての法と時制を伴った形ならびに前置詞 dessus は例外である。これらの語にあっては u は常に，たとえ s が前にあっても発音される。

またしかし，ピカルディ，ブルゴーニュ，シチリアのレオンの町の人は上記の三つの文字［g, q, s］のあとでやはり u を発音する。例へば：

quatre（4：数詞）quarrant（40）のように。しかしそれは不適当で規則に反する。

イングランド人，スコットランド人は u をそれらの文字のあとで発音する。特にラテン人の間では彼等の母語においてそういうことだ。このように：

quar, quatuor（4：数詞）quare（何となれば）quaier（帳面）そしてその他の同様のもの。

17. X は語末において s または z のように発音し得る。例へば：

chivalx（馬），chiveux（毛髪），huiseux（布裂），oisealx（鳥），tieulx（そのような），ceulx（彼等の），sealx（印），sielx（空），および mieulx

これらの語は無差別に s，x，または z をもって書いてもよい。

知っておくべきことは Dieux は x を語末において保持しないということだ。全く単独で主格または呼格にあるときは別であって，韻律上の理由がある場合も別である。

こういう格で x を保っていても発音する場合としなくてもよいときがある。それはちょうど主格において x が存在し直後に子音がつづく場合などであって子音が続くと x は発音しない。このように：

Dieux vous garde（神が貴方を守られますように）又は

Dieux soit gart de vous（神が貴方の守護となって下さるように）

dieux が呼格にある時は常に音を保つ。次のように：

beal sire Dieux regardez moy en party

（うるわしき主なる神よ，私が出掛ける時は見守って下さい）

さて次の語：

ferai（私はするだろう：faire, ind. fut. 1^re^pers.），serai（あるだろう：être, ind. fut. 1^re^pers.），

seirai（坐ろう：asseoir, ind. fut. 1^{re}pers.），verai（見よう：voir, ind. fut. 1^{re}pers.），orai（聞くだろう：ouir, ind. fut. 1^{re}pers.）

このような語は一つの r を伴って正しく発音され，書かれなければならない。次のような語とは異るのである：

ferrai, serrai, pourrai（できよう：pouvoir, ind. fut. 1^{re}pers.）verrai や orrai など。

しかし下記の語は rr と重ねて書くべきだ：

crerra（信じるだろう：croire, ind. fut. 3^{e}pers.），morra（死ぬだろう：mourir），pourra（できよう：pouvoir），parra（現れるだろう：paraitre），lerra（放っておく：laisser），plerra（気に入る：plaire），larron（盗賊）やlierres（泥棒）のような語はちょうど正しい音が要求するように正しい綴り rr 二つをもって書かねばならない。

ovec（共に）という語は，明らかに見られるように，aveque, avuec, avecques, avec と様々な地方の習慣に従っていろいろに書き得る。しかし s を語の中に ovesque と書くのは間違っている。

この selonc（従って）という語では n または c をもってどちらで終っても良い。selon またはselone のように。

次の語，escu（楯），escuier（楯持ち），escueille（杯），cueller（スプーン）およびこれらの語から派生する全ての分詞と名詞は，ちょうど正しい音が要求するように c を持って書き，q をもって書いてはいけない。なんとなれば q をもってesquier, esquelleというように書くと，我々は eskier, eskelle と発音することになるだろうから。この現象はガリア語ではない。丁度 u に関する規則によってそれが充分に証明されるようにである。

18. Y はどんな場所でも i の音をもち，非常に多くの場合装飾のために i のかわりに書かれるべきだ。特に固有の町の名前，人名，男性，女性の名，そして尊厳をあらわす名詞などである。このように：

Gunnyngton,　Guynton,　Guylliam de Boyton というように。

19. Z は語末においてはほとんど s のように事実発音される：

querez (quérir), sarchez (chercher), aimez (aimer), lisez (lire)と。

そして同様の語についても既に述べた我々のガリア語の論述において同じ説明が示されている。

また，次のことを知るべきだ。ある単音節の語が母音で終り，次にくる語が母音で始まる時はいつもそれら二つの語は互いに一語のように発音されなければならず，最初の母音は書かれるべきではないし，自らの音を保持すべきでもない。このように：

l'abbe（大僧正），l'abbeye（僧院），l'ombre（影），l'oue（あひる），d'or（金の），d'argent

(銀の)，guest（沢山)，quore（心)，n'a（持たない)，n'este（しない)，n'ya（其処にない)，n'envoier（送らない）そして同様のものも同じ。

全ての動詞で活用に際してｓで終る場合は書く人の意志によってｓまたはｚと書くことができる：

aimez（aimer)，beneiez（祝福する：bénir)，ditez（dire)，prennez（prendre）のように。

ｅで終る全ての分詞はどの性であれ，それらの語から派生する語の音と区別するために語末においてeeと二つのｅをもって書かねばならない。

例へば過去分詞 amee（愛されたもの：fem. sg.）は二つのｅをもって上述の語と区別するために書かなければならない。

enseignee（教えられた：fem. sg.）は次の語 enseigne (enseigner) と区別するために，menee（導かれた：fem. sg.）は mene（mener）と，donee（与えられた：fem. sg.）はdonne（donner ind. prés. 1^{re}pers.）と区別するためである。

またいくつかの男性の現在分詞でｔに終る場合，excellent（すぐれた）についても，女性になると音においても綴においてもｅを加えｅと発音しなければならない。しかし分詞の語末のｅの前にｉがある場合はこの限りにあらず，例へば：

appareillie（準備をした：appareiller）veillie（徹夜をした：veiller）と，このようになる。

c，f，gで終る全ての男性名詞で単数は blank（白い)，vif（元気な)，long（長い）と，このようになり，複数は語末にｓをもって書く。その際，c，f，gは完全になくなって blans，vis，lons となる。しかし次のような語 long, sang（血液）は単数ではｃまたはｇのどちらをもって書いてもよい。例へば lonc, sanc, long, sang のようにである。

男性であれ，女性であれ全ての名詞で語末に二重の母音の音 ee を持つものは ee をもって書く。このように：

amee（愛されたもの)，pansee（考えられたもの)，puree（純粋にされたもの)，rousee（露がしたたるもの)，vinee（樽に入れられたぶどう)，sunee（音を立てられた）と，そして同様のものも同じ。

男性単数においてｔで終るような女性形容詞，sainte（聖なる)，mainte（多くの）などはもちろん例外である。まことにそれら上記の分詞又は名詞において，二重の ee が音をもって存在する時は，書き方において完全に ee と書かなければならず，他の語においてもまさに上述した如く同様である。

さて，学問をしている者たちは，各人の時間を労費することなく，彼等を力づける三位一体の御加護により花を咲かせ得るであろう。彼等すべて，および各々にとってその他のことについても正しく教えられん事を望むものである。

三位一体においてしろしめす全能の父は御心(みこころ)の恩寵と恩恵を與え給い，私，パリのT．H．なる学生が諸国の言語についての言葉の形と書き方の真理をひき出すよう，よく導き給うであろう。意志においても知識においても不足する者であるが，心からなる信仰をもって。アーメン。

ここにパリの習慣と形式に従って新しく世に出された M.T. Coyfurelly 司教座参事会員，オルレアンの博士，民法，司法官によるフランス語正綴論の論文は終わる。

＊　＊　＊　＊　＊

〔記〕

本稿はM.T. Coyfurellyによって発表された「ガリア正綴論」の翻訳である。本文は14世紀後半に作成されたものと考えられる。中世イングランドで最も普及したと言われている，フランス語教本*Orthographia Gallica*（大手前女子大学論集第21号拙訳）よりは新しいもので，M.K. Pope は実際に論文が作られた年代をエドワードIV世の時代の後半，あるいはリチャードII世の時代としている。(cf. M.K. Pope ed., 'The Tractatus Orthographiae of T.H., Parisii Studentis,' *Modern Language Review,* vol. 5, 1910, pp.187－88.) コワフュルリィ自身が論文の末尾に記している如く，パリの学生T．H．による「正綴論」を新しく書き改めたものである。

コワフュルリィの論文は1879年に E. Stengel によって一度 Oxford, All Souls College 写本 182より刊行されて，*Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur,* Band I に収録された。貴重な資料であるから今回は翻訳と共に Stengle の翻字したラテン文を転載した。(この第1巻には，ある英国人の著わしたフランス語会話書 *La manière de language* 1396年や，John Barton 編の*Donait francois*も収められている。)

Stengel editionと写本との照合及び，コワフュルリィの本論に見られるアングロノルマン語の特徴，フランス語文法の記述の誤り，論述の曖昧さ，などについての指摘は後の稿に譲ることとしたい。